

## 令和1年度臨床リウマチ学会誌注目すべき論文

### 令和1年度臨床リウマチ学会誌注目すべき論文

松野 博 明

令和1年も臨床リウマチ学会誌は、多くの論文を発表する機会となりました。その中でも特に興味深い論文をいくつか紹介します。まず、関節炎の治療法に関する論文では、新しい薬剤や治療法が開拓されています。また、免疫系の機能亢進による疾患に対する研究も進歩の一途を辿っています。一方で、骨髄炎などの疾患に対する治療法についても、多くの研究が行われています。これらの論文は、臨床医にとって非常に参考になるものばかりです。

#### 要旨

本誌は、臨床リウマチ学会の会員による論文を収載する機関です。その内容は、主に骨・筋肉・関節の疾患や免疫系の疾患に関するものです。また、治療法や予防法に関する研究も含まれています。今後も、この種の研究がますます進歩するものと期待されます。

本誌は、臨床リウマチ学会の会員による論文を収載する機関です。その内容は、主に骨・筋肉・関節の疾患や免疫系の疾患に関するものです。また、治療法や予防法に関する研究も含まれています。今後も、この種の研究がますます進歩するものと期待されます。

臨床リウマチ(日本臨床リウマチ学会雑誌)別刷

令和2年3月発行

Vol.32/No.1

日本臨床リウマチ学会編  
株式会社リブ出版

## 誌 説

# 令和1年度臨床リウマチ学会誌注目すべき論文

松野リウマチ整形外科

日本臨床リウマチ学会誌編集委員長

松 野 博 明

うございました。これからも引き続き宜しくお願ひ申し上げます。

## 優秀論文賞

本年も1年の総括として注目すべき論文の要旨を報告させて頂くことにしました。例年にならない先ず優秀論文賞を受賞された2論文を紹介させて頂き、引き続き筆者が感じた選には残念ながら漏れましたが注目される臨床的示唆に富んだ論文を紹介させて頂くことにしました。論文内容に興味を持たれた先生は是非、本誌の本論文を参照頂きたいと思います。また現在本誌の採択率は約7割であり掲載された論文はいずれも価値ある研究論文ですが、誌面の掲載スペースの関係上一部の論文の紹介にとどまることをお詫び申し上げたいと思います。

日高利彦先生の論文(臨床リウマチ 30, 38-50, 2018)では、トリシリズマブ(TCZ)で治療された関節リウマチ(RA)患者を70歳未満の患者と70歳以上の患者の2群に分け、1年間の観察研究からTCZの有効性と安全性を比較検討されています。患者背景としては、70歳以上の高齢患者群には合併症である間質性肺炎・高血圧の比率が高く、メトトレキサート(MTX)の併用量と併用割合が低い状況でしたが、TCZの有効性は、DAS28-ESR, CDAI, ACRの達成率、EURAの反応性いずれの評価においても

## はじめに

令和1年度優秀論文賞は今年も本誌編集委員先生方による厳正なる審査の結果、日高利彦先生の“当院における高齢関節リウマチ患者に対するトリシリズマブの治療効果と安全性”と田中良哉先生の“メトトレキサート未治療早期関節リウマチ患者に対する予後不良因子の検討とセルトリズマブペゴルの有効性の検討：無作為化、プラセボ対照第三相、C-OPERA試験のサブグループ解析”的2論文が受賞され、名古屋で石黒直樹先生により開催された第34回臨床リウマチ学会において本学会理事長である竹内勤先生より表彰状と副賞が贈られました。受賞された両先生には誠におめでとうございました。また両先生にはこれからも本誌発展のため引き続きご尽力頂ければ幸甚と考えております。現在本誌には多数の論文が投稿されるようになっており、これにともない論文の査読件数も増えています。編集委員の先生方はじめその要請をうけ査読頂いた先生方には心より感謝申し上げます。また今回からこの査読のご苦労に報いるため、年間最多論文査読を頂いた先生を表彰させて頂くこととしました。第1回の今回は東海大学医学部内科学系リウマチ内科の佐藤慎二先生が受賞され、竹内勤理事長より感謝状と副賞が贈られました。査読のお仕事、有り難

Notable articles of the Journal of Clinical Rheumatology in 2020  
Hiroaki Matsuno.

Matsuno Clinic for rheumatic diseases

Editorial Committee Chairman of the journal of clinical rheumatology and related research

DOI: 10.14961/cra.32.1

ても高齢RAが劣るということではなく、むしろ治療1か月後の治療開始短期TCZの反応性はDAS28-ESRやCDAIでは高齢患者のほうが良いという結果でした。またEUR Aのgood responseの比率も高齢RA患者のほうが高いという結果が得られています。有害事象や治療継続率は年齢による有意差はなく、これらのことから高齢RA患者におけるTCZの有用性が示されています。高齢RA患者ではしばしば腎機能障害の問題や認知知能低下による誤服薬のためMTX等の経口csDMARDの治療が困難なこともあります。このような場合は、注射薬であるTCZは有用な治療選択肢となることを示されています。

田中良哉先生の論文（臨床リウマチ 30, 89-97, 2018）では、予後不良因子を持つ発症1年以内の発症早期RAにおいて高用量MTX治療群とセルトリズマブペゴル（CZP）とMTX併用治療群の2群の比較試験を多施設共同研究により行いその効果を検討されています。その結果、高用量MTX治療群は発症早期RAにおいて高い寛解率と骨破壊の抑制を導いていましたが、発症早期から高疾患活動性のある患者ではMTXのみでは寛解しきれないことが示され、検査項目としてMMP-3, RF, TNF $\alpha$ , IL-6が高値の症例では骨破壊が進行していました。しかし、高疾患活動性の患者であっても発症早期からのCZPとMTXの併用療法を行うことによりRAの関節進行抑制が認められ、また臨床的にも寛解症例が認められました。このことから発症早期からの生物学的製剤の介入が必要な症例があることが明らかになりました。今後の発症早期、高活動性RA治療の治療方向性として重要な示唆を与える論文と考えられます。

#### その他の注目すべき論文

臨床リウマチ学会は医師、看護師、薬剤師、理学療法士、作業療法士、製薬メーカー等のRA診療や治療に関わる全ての幅広い層に開かれた学会であり毎年多くの製薬企業の研究者の先生方の参加も頂いています。そうしたことから我々医師も製薬企業のノウハウも学びたいと考え今回からメーカーの方々の創薬や研究に關

わる論文も募集させて頂きました。

青野浩之先生の“関節リウマチの動物モデル（臨床リウマチ 30, 28-37, 2018）”では現在創薬のため製薬メーカーで幅広く使われている数多くの関節炎モデルの特色から歴史まで詳細にレビューして頂きました。

浦山雅和先生の“AORAレジストリーにおける関節リウマチに対するトリズマブ治療の効果不十分による脱落症例の検討（臨床リウマチ 30, 114-119, 2018）”では秋田県における多施設における数多くの症例検討からTCZが効果不充分となるのはTNF阻害薬からのスイッチ群が多いこと、またTCZの脱落例であってもTNF阻害薬、アバタセプトが有効であることがあることが示されました。

坂根英夫先生の“トリズマブ投与中に下腿MRSA膿瘍を発症した関節リウマチの1例（臨床リウマチ 30, 120-125, 2018）”は稀なケースではありますがTCZ治療中に感染症を発症した場合、臨床症状や検査所見が抑えられてしまうことがあるので、治療中は注意深い観察が必要であることを示され臨床的に示唆に富む報告であると考えされました。

伊藤聰先生の“寛解後のTNF阻害薬減量・中止は可能か（臨床リウマチ 30, 199-209, 2018）”では生物学的製剤の減量やフリーの可能性について言及され、生物学的製剤により疾患がコントロールされた場合のcsDMARDへの変更や工夫について論じられています。今後の医療費抑制の方向性についても重要な示唆を与える論文と思われます。

廣畠俊成先生の“神経精神ループス（臨床リウマチ 30, 224-230, 2018）”では診断に髄液中の抗NR2抗体値上昇に加え、ループス精神病患者の中でもacute confusional stateの患者では特に髄液でIL-6濃度が高くなることから、ループス精神病患者の重症度判定に髄液中IL-6濃度測定が有用であることを示されています。

土屋政幸先生の“バイオ医薬品の半世紀（臨床リウマチ 30, 255-261, 2018）”ではご自身が研究開発にかかわられたTCZの開発に加え、その他の国産生物学的製剤の紹介から次世代抗体

医薬品・核酸医薬品の展望まで幅広くかつわかりやすく解説頂いています。

神崎初美先生の“災害時の関節リウマチ患者に必要な看護支援（臨床リウマチ 30, 284-287, 2018）”では災害時におけるRA患者の薬物治療行為に加え、日常生活に必要な身の回り品の大切さ、患者の移送のこと、災害発生時から中長期にいたるまでの看護師が介入すべき精神的サポートまで具体的にわかりやすく解説いただいている。

### さいごに

今年も多くの方から数多くの玉稿を賜り本誌のレベルも年々確実にアップしていること編集委員一同たいへん嬉しく思っています。今後も本誌の格調を高めるべく努力してまいりますので先生方におかれましても引き続き多数の投

稿宜しくお願い致します。

### 臨床リウマチ学会誌編集委員

松野博明（編集委員長）、亀田秀人（東邦大学医学部内科学分野膠原病学）、菅野祐幸（信州大学医学部病理組織学）、佐藤慎二（東海大学医学部内科学系リウマチ内科学）、田中栄（東京大学医学部整形外科学）、中島亜矢子（三重大学病院リウマチ・膠原病センター）、中原英子（大阪行岡医療大学 医療学部・行岡病院内科）、藤尾圭志（東京大学医学部アレルギー・リウマチ内科）、堀内孝彦（九州大学病院別府病院免疫・血液・代謝内科）、松下功（金沢医科大学リハビリテーション医学科）、森雅亮（東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科生涯免疫難病学）、敬称略